

目次

- ・ 「司書講習科目」（省令科目）と「図書館史」（科目）についての現状（寺田光孝）
- ・ 『転換期における図書館の課題と歴史』論評（山口源治郎）
- ・ “図書館文化史”研究について（山本順一）
- ・ 第13回研究集会・総会
- ・ 研究例会のお知らせ
- ・ 事務局より

「司書講習科目」（省令科目）と「図書館史」（科目）についての現状

寺田 光孝

（図書館情報大学）

日図協図書館学教育部会長の渡辺信一氏から会員宛の本年1月6日付けの通信で、「文部省生涯学習審議会計画部長が「司書等の養成及び研修の在り方の充実について」文書によるヒヤリング”を行うことになり、日図協・理事長あてに意見を求めてきた」旨の通知があった。これは、生涯学習審議会社会教育分科審議会計画部会長名による日図協理事長宛の「社会教育主事、学芸員及び司書等の養成及び研修の充実の在り方についての意見照会について（依頼）」という意見照会についての報知である。その内容は、同分科審議会の司書養成科目（省令科目）の改善案の提示であり、同案（3）司書等の項では、司書は現行19単位から改善案合計20単位（必修科目12科目18単位、選択科目5科目5単位[2科目選択]）、司書補現行15単位から、改善案は単位数は同じく15単位（すべて必修科目）というものである。これによれば、司書では「図書及び図書館史」1単位が選択科目の一つとして辛うじて残り、司書補では、「図書館史」は落ちている。

この事態を受けて、図書館文化史研究会の運営委員会で検討され、小川徹代表から当研究会の意見を日図協事務局長に伝えられた由であるが、文部省の上記審議会の議論が非公開のものであり、また文部省から当研究会宛に照会があった訳でもなく、日図協から当研究会に照会があった訳でもない。この問題についてはつねに隔靴搔痒の感が否めないが、これまでこの問題に対しては、われわれ会としても座視できず、過去文部省に申し入れを行った経緯があるので、以下簡単にこれまでの経過を述べ、会員諸氏にご報告したい。

まず、図書館法に基づく図書館法施行規則（文部省令）の司書及び司書補の講習での科目（最終改正昭和43年）の司書19単位は、施行当時から図書館界の要望とはかけ離れたものであり、問題も多く、議論も活発になされてきたが、長い間放置されてきた。図書館界では、特に日図協教育部会が中心となって昭和62年頃からこの問題に関する活発な議論がなされていたが、一般には、平成2年文部省生涯学習局学習情報課に「社会教育審議会社会教育施設分科会図書館に関するワーキンググル

ープによる検討会」が設置され、文部省当局による改正の動きが具体化し、関係者を啞然とさせた文部省の15単位素案が明らかになるに及んで、この問題は俄然魚眉の問題として認識されるようになった。当研究会も例外でなく、この素案で「図書館史」が外されていることを知り、危機感を抱いたのであった。これがこの問題を当研究会の運営委員会で問題にした発端である。

この問題に対して、当研究会では、大学での教育科目としての図書館史と司書の養成科目としての図書館史とは別次元の問題であるとの意見もあったが、しかしながら、その影響するところが少なくなく、この現実に対処すべきとの意見が多くだされた。そこで当研究会では、会員に意見徴集を図り（『ニューズレター』第42号）、平成3年に文部大臣宛に「図書館学教育カリキュラムの改訂における「図書及び図書館史」の扱い方に関する要望（平成3年6月7日付）」（『ニューズレター』第43号）を署名を添えて提出するとともに（『図書館年鑑 1992』にも載録）、文部省生涯学習審議会社会教育分科審議会施設部会図書館専門委員会（検討会の名称変更）宛に当研究会の意見書（平成3年11月5日付）を文書で提出した。この文書には図書館史の科目内容をも示している（『ニューズレター』第45号）。同年の徳島県で開かれた全国図書館大会でも当研究会の河井先生の努力で「司書講習科目（新カリキュラム案）についての要望」が大会決議された。

その後文部省では、人事の変更などもあり、平成4年、5年には目だった動きはなかったが、昨年、再び急ピッチで審議されているとのことであった。この間、日図協図書館学教育部会では、度々論議を重ね、平成6年には部会最終案24単位案をまとめている。当研究会としては、文部省の動きには当然注視していたものの、詳しい動きは殆どつかめず、教育部会を通してしか情報が入らなかったこともあり、また教育部会の部会案で当初は図書館史は落ちていたが最終案には「図書館特講」の位置づけで「図書館史」1単位が含まれたことなどから当研究会としてはその後目だった活動はせず、教育部会の活動に依存しつつ、同部会の動きを注視しながら、経過を見守っていたというのが実情である。

そして、今回の冒頭に記したような、文部省による20単位の改善案が示されたのである。今回の案は生涯学習審議会社会教育分科審議会の計画部会からの案である。施設部会（図書館専門委員会）との関連性については、計画部会が総論的な問題を扱い、上位組織との説もあるが、組織的には両者は社会教育分科審議会の横並びの部会であり、どのような関係かよく承知していない。いずれにしても、今度の改正案も、15単位の後退案よりは改善であるが、20単位は単位としてそう大きな収穫とは言えない。しかも、司書講習がもともと公共図書館対象とはいえ、他館種にも準用されてきたが、今回児童サービス論が必修になるなど公共図書館的な色彩が一層濃いものとなっている。こうした点で、特に念願の24単位との関係で日図協の教育部会がどのように対応するのか、見守るしか手だてはない。当研究会としては、審議会の部会の議論として図書館史の問題がかなり論議されたように洩れ聞いていただけに、図書館史が選択科目で残ったことにひとまず安堵したというのが正直なところである。当研究会としては当研究会のささやかな運動も一応の成果をあげたと見ることもできよう。しかし、まだ確定していない状況なので、当研究会としても最終の決着まで見守っていく必要があるし、なによりも本質論としては、図書館情報学の教育における図書館史の問題を今後真剣に議論していく必要があろう。

なお、この問題の全体に関しては、日図協図書館教育部会『会報』の第24号以降、

また『図書館界』、『図書館雑誌』掲載の関連記事を読みたい。特に日図協教育  
部会で長く係わってこられた渡辺信一氏の「図書館員の養成と教育」（『図書館界』  
Vol.45, no.1, 1993, p.151-160）は詳しい。

第1回例会報告（1995年12月9日 法政大学）

『転換期における図書館の課題と歴史：石井敦先生古希記念論集』  
（緑陰書房 1995年）論評

山口 源治郎  
（東京学芸大学）

本書所収の論稿は、各部とも多彩でありながら、結果としてバランスのよい構成  
となっている。本書第1部「図書館の現代的課題」は、県立図書館論、職員論、生  
涯学習との関連、図書館の自由など、表題通り転換期にある現代公立図書館が直面  
する理論的、実践的課題をテーマとした力作揃いであり、多くの示唆を得ることが  
できる。第2部「図書館の歴史的展開」の論稿も、英米研究がないことを除けば、  
館種、時代ともにも多彩であり、手堅い実証論文が多い。

第2部の日本図書館史研究について触れれば、小川徹「1880-90年代農事諸会の  
萌芽としての図書館」が、明治期の農村における図書館を論じた人物（津田仙）に  
焦点を当てその歴史的意味を論じており、興味深い内容となっている。特に小川は  
1880-90年代の津田仙の図書館論の重要な要素（図書館成立の契機）として「農村  
の生産と生活が結合」を見出し評価している。これまでのこの時期の図書館史研究  
は主として自由民権結社の読書施設と明治政府の図書館政策に内在する図書館論の  
分析であったが、それは対抗しあうそれぞれの勢力（民衆と国家）の図書館論を  
「思想形成」を軸に分析評価するものであった。この点で小川論文は新しい分析評  
価軸として「生産と生活」を提示している。

“図書館文化史”研究について

山本 順一  
（図書館情報大学）

1 はじめに

ニューズレター54号（95年11月15日付）において周知された通り、総会の承認を  
得て、これまでの“図書館史研究会”は“日本図書館文化史研究会”とその名称を  
改めた。それは‘図書館学’が‘図書館情報学’と看板を掛け換えたのにも似て、  
研究対象の拡散化を肯定する一方、新たな学問的体系性を模索しようとするものと、  
個人的には理解している。

2 アメリカでのエピソード

アメリカで発行されている関係学術雑誌のひとつに *Libraries & Culture : a  
Journal of library history* がある。これはテキサス大学オースチン校大学院図

書館情報学研究科が編集し、同大学出版会が発行している（季刊）。当該雑誌の見返しに、「*Libraries & Culture* 誌は、時間や空間について限定することなく、文化的、社会的歴史の文脈において、記録された知識のコレクション（その生成、組織化、保存、および利用）の意義を探究する学際的な研究誌である」と書かれており、その趣旨は今回の我々の“図書館文化史研究”へのアイデンティティの変更に通じるところがあると認識している。

付け加えれば、*Libraries & Culture* もまた、1966年に創刊されたときの誌名は、*Journal of Library History*（副誌名：Philosophy & Comparative Librarianship）であった。創刊から1976年まで、フロリダ州立大学図書館学部が編集発行にあたり、1988年に現誌名に変更したわけである。*Journal of Library History*の最終号（22巻4号：1987年秋）の巻頭に、編集部より“*JLH Becomes L&C*”という記事が掲げられている。そこには「新しいタイトルは、創設者たちのもともとの目的に変更を加えるものではなく、社会における図書館、公文書館、および情報機関の役割と影響力に対する認識の深まりを反映している」とあるが、1966年以來のアメリカ図書館界とその周辺に生じた多くの変化を踏まえたものであった。関連研究テーマの増加と類縁機関などへの研究対象の拡大と、従来の誌名では‘古典的図書館（史）学’が持つかもしれないと思われる好古趣味や研究対象と手法の狭さといった一般的に持たれかねないイメージを嫌ったこともあるようである。

### 3 “図書館文化史研究”について

‘文化’というものは、それまでの状況に手を加え人間の作りだすものにかかわる人間の精神生活的側面をいう概念であり、図書館を研究対象の中心とすることに代わりはなくとも、 $\text{図書館史} \leq \text{図書館文化史}$  の図式が成り立つように思える。

『図書館用語辞典』（角川書店）の“図書館史”の項目は、「図書館に関する諸事象や思想などの生成・発達・展開の経過を扱った歴史。図書館の形成過程はもちろん、図書館事業の創始、発展、図書館諸業務の歴史的経緯、図書館に対する観念の変遷などもその研究対象となる」とある（p.451）。また、いささか古きに過ぎるが、和田萬吉の『図書館史』（芸艸会、1936）の巻頭に「其知識の中で第一に大切なものは、自分と同業であつた人々の成したる業績のそれである」（pp.1-2）と記されている。データが不十分で短絡的との誹りは免れないが、従来の‘図書館史’研究のスタンスは、歴史学的方法論を堅持しつつも、主観的に図書館内部の視点が濃厚で学際性に乏しいうらみがあつたかもしれない。

しかるに、アメリカ図書館史研究においては、早くも1884年にタイラー（Moses Tyler）が公立図書館への進化論的發展を提示し、1949年にJ.H. シェラ『パブリック・ライブラリーの成立』（*Foundation of the Public Library*）において17世紀から19世紀にかけてのニューイングランド地方の公共図書館の發展動向を社会学的に分析しており、同じころ（1947年）ディツイオン（Sidney Ditzion）の『民主主義と図書館』（*Arsenals of a Democratic Culture*）は副題に示された通り‘ニューイングランドと中部大西洋諸州におけるアメリカ公共図書館運動の社会史 1850-1900’をまとめている。そのほか、ハリスやギャリソンも卓越した研究成果をあげており、それぞれ広い視野の中で図書館現象を分析している。わが国においても、たとえば石井敦は批判の向きもあろうが日本資本主義との関連ですぐれた実証的分

析を行っている。

このようにすでに斯界に優れた先行研究はあるが、これまで図書館史研究という一館史や特定地域の図書館史にかかわる研究などにあつては、それらの事例に閉じられた広がりのない自己完結的研究が多かつたような印象をもっている。“図書館文化史”研究という新しい看板のもとでは、一館史や特定地域の図書館史の研究においても、社会構造全体との関わりを押さえるとともに、一貫した伝統や特色の解明に踏み込み、図書館発展の筋道や方向に迫るものでありたい。すなわち、“図書館文化史”研究では、以前同様、研究対象として、一応、図書館を中心とし、実証性を尊重する歴史的研究方法を堅持しつつも、①学際性と②社会科学性（これについては研究会の参加者から異論が唱えられた）を強化する方向が望まれる。

#### 4 むすび

“図書館文化史”研究は、‘電子図書館’や‘デジタル・ライブラリー’という新たな動向にも（批判的論理実証的に）対応しえ、その外延部にメディア史（見方によれば図書館もひとつのメディア）、情報史等を包含するものでありたい。また、過去の歴史的事実に埋没することなく、過去を現在から捉えようとする態度（現在史的視座）や過去を未来から捉えようとする態度（未来史的視座）も大切にしたい。

最後に、副次的効果のひとつとして、今回の日本“図書館文化史”研究会への改名が、若くて有能な研究者の誘引に少しでも役立てば幸いである。

#### ==== 機関誌名および会名英文略称アンケート結果（中間発表） =====

機関誌の新誌名および会の英文略称について募集しましたが、応募が少ないため、今月末まで延期します。7月の総会で決定したいと考えています。12月15日現在の応募状況は下記のとおりです。

##### (a)機関誌名

図書館文化史研究(9)、図書館文化史(3)、図書館史研究(3)、図書館文化(2)、図書館文化論集(1)、日本図書館文化史(1)、日本図書館文化史研究(2)、文明と図書館(1)、L & I History(1)

##### (b)英文略称

JALIH(3), Jlich(1), JLIH(1), ALIS(1), Library and Information History(LIH)(1), Japan Society of Cultural Library History(JSCLH)(1), Bulletin of Library & Information History(BLIH)(1), JALIS(1)

1996年度日本図書館文化史研究会 第13回研究集会・総会  
— 発表希望者・参加者の募集について —

日本図書館文化史研究会では、下記の要領で研究集会・総会を開催します。研究集会での研究発表希望者と参加希望者を募集します。

◇ 研究発表希望者は、3月末日までに次の諸項目を記載したものを封書で事務局あて申し込んでください。氏名、住所、電話番号、所属、200字程度のシラバス。内容は、テーマの“図書館思想の形成”に関わる研究で、未発表のものとしします。募集人員は5～6名です。

◇ 参加希望者は、<はがき>または<E-Mail>で5月末日までに、次の諸事項を明記して、研究集会・総会事務局まで申し込んでください。氏名、住所、電話番号、所属、懇親会参加希望の有無、14日の弁当斡旋の希望の有無。参加申し込み者には、6月上旬にプログラム・会場案内を郵送します。

記

1996年度日本図書館文化史研究会 第13回研究集会・総会開催要領

- 日時 : 1996年7月13日(土) - 14日(日)  
会場 : 大阪府立大学学術交流会館 堺市学園町1-1  
(大阪地下鉄御堂筋線中百舌鳥駅より徒歩15分)  
参加費 : 資料費および通信費若干ある予定(当日受付で)  
内容 : テーマ“図書館思想の形成”(仮題)  
\*講演 天満隆之輔氏「ヨーロッパ近世における図書館思想の形成」  
\*5-6名の研究発表および討議  
\*日本図書館文化史研究会総会

7月13日終了後、懇親会を行います。会費5,000円程度。なお、会場付近はとくに土日曜日に利用可能な食堂が少ないので、希望者には14日の昼食弁当を1,000円程度で斡旋します。申し込みの際、懇親会と弁当の有無を明記してください。

なお、宿泊は斡旋しませんので、各自で手配してください。

研究集会 — 事務局

石井 敬三

職場

大阪府立大学総合情報センター

(研究集会・総会当日は土日で  
交換業務がありませんのでこの番号は使えません。)

宿泊： 実行委員会では斡旋いたしません。各自で予約してください。

堺市内で宿泊される場合、次の2つのホテルで、予約時に「日本図書館文化史研究会参加のため」といえば、割引料金で宿泊できます。

1. 東京第一ホテル  
TEL 〇〇〇〇〇〇 割引料金 9,000円

2. 堺イン  
TEL 〇〇〇〇〇〇 割引料金 6,600円

いずれもシングル1泊、朝食付き、税・サービス料込みの料金です。

<上は、堺市のコンベンション誘致政策を推進している堺市の外郭団体、堺観光コンベンション協会の仲介により割引が実現しました。>

また、次の2つの施設がお勧めできます。

1. ホテルアウイーナ大阪（旧なにわ会館）  
TEL 06-772-1441 公立学校共済 地下鉄乗り換え1回

2. 大阪宿泊所以和貴荘（にわきそう）  
TEL 06-622-1275 地方職員共済 地下鉄乗り換えなし

その他を探される時は、大阪地下鉄沿線か南海電鉄高野線沿線が便利です。堺市は市域が広いので場所によっては、会場への交通が不便な場合があります。大阪市内で地下鉄沿線の方が確実かと思えます。

#### 原稿募集

- ◇ 機関誌13号（1996年9月発行予定）の原稿を募集します。  
400字で40枚程度。〆切は3月末。投稿を予定されている方は、「論題」を下記あて、お知らせください。  
採否は編集委員会で決定します。

#### 原稿の送付先

小黒浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。  
研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

~~~~~ 研究例会のお知らせ ~~~~~

第2回

日時：1996年3月16日（土） 午後2時から4時まで  
国立国会図書館内の中林（図書館研究所）あておたずねください（入口は南口です）。

発表：国立こども図書館構想－過去・現在・未来－  
田中久徳（国立国会図書館）  
「近代日本図書館史年表」の作成と課題  
奥泉和久（横浜女子短期大学図書館）  
(いずれも仮題)

今後の予定

- ◇ 1996年9月 未定
- ◇ 1996年12月 未定

\* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度。申し込みは事務局まで。

~~~~~  
会員消息

新入会員

訃報 弥吉光長 氏 (1996.1.20) ご冥福をお祈りいたします。

◇事務局より

会員名簿を掲載する予定でしたが、はがきの返送が54通ほどでしたので、次号に延期させていただきます。はがき未返送の方はなるべく早くお送りください。

会費未納の方には別紙を同封いたします（年額 3,000円）。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明